

友の会だより 3号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方
電話・FAX 042-591-1853

友の会2008自主企画

私のイタリア旅行記

豊田 岩男

都歴研友の会では、2008年度の海外研修地としてイタリアを選び、11月4日から11月11日まで旅をしてきました。村木先生のお骨折りにより事前学習も旅行中の学習もバッチリしました。参加者は、友の会関係者が10人、村木先生の知人関係者が15人と総勢25人でした。

第1日目(11月4日)

成田を11月4日の午前10時30分に飛び立ち、12時間余りうとうとしながらルフトハンザ機中で過ごし、途中フランクフルトで乗り換えローマには当地の夕方に着きました。チャーターバスでローマ郊外のクリストフォロコロンボホテルに向かう途中で暗くなり、夜空には雷鳴が轟き、これからの旅行を暗示しているかのようでした。

ローマ古代の広場に行く

第2日目(11月5日)

しかし、一夜明けると晴天が広がり雨上がりの気持ちのいい朝でした。

チャーターバスでローマ郊外のホテルからカピトリノ美術館やフォロ・ロマーノがある都心へと向かいました。私がまず注目したのは街道沿いに植えてある松並木でした。松の形状が独特で、



ローマ

日本では見かけたことのない笠状に仕立ててありました。後で分かったことですが、このような松はイタリアでは珍しくもなんともないごくありふれたものでした。しかし、初めてイタリアを訪れた私にとって新鮮に見えたらしく、写真を何枚も撮っていました。落ちていた松ぼっくりを手にとってみると意外と大型のもので、日本の黒松や赤松とは別種の松でした。

次に、我々の乗っているバスの前後横や対向車線を走っている車の殆どは、日本車のビッツやフィット、マーチタイプの小型車でそれより大型の車やSUVタイプの車はあまり見かけませんでした。車種では、前記の日本車も走っているのをあ



ちこちで見かけました。水道橋を横切り、このとき初めて、古代の史跡に接近してきた実感がわいてきました。ローマの中心部に入り、まずはコロッセオの前に来ました。コンスタンチヌス帝の凱旋門もあります。世界史の授業の中で、教科書に載っているこれらの写真を生徒たちと見ながら、毎年繰り返して古代ローマ史を説明したものでした。今、その実物の前に立っています。（筆者は世界史の教師をしていました。）

周囲を見渡すと、日本人観光客が目立ちます。これは、ガイドの原井さんによると、ヨーロッパでは11月にはいると日も短くなり冬がやって来たことを意味し、アルプス以北の観光客がグッと減り相対的に日本人観光客が目立つようになったということだそうです。

ローマ皇帝の宮殿跡を見ながらフォロ・ロマー

ノを通過し、カピトリニ美術館に行き、見学後ここで昼食を取りました。私の昼食は、ハムと野菜のサンドイッチとビールでした。この建物の屋上から西方を眺めると、テヴェレ川を挟んでサン・ピエトロ大聖堂の丸屋根を眺望することができました。また、ここでは近くの木に止まっている白黒のカラスを見かけました。イタリアのカラ都心部に入る手前で古代ローマ時代のスは真っ黒ではないのです。途中のフォロ・ロマーノでは、今でも学生による発掘調査が行われていました。この日は快晴となり、日中は気温も上がり汗ばむほどでした。

昼食後、サン・ピエトロ大聖堂へ行きました。大聖堂前の広場には、入場を待つ人々が長蛇の列となっており、私たちはここで、大聖堂拝観後スペイン広場へ行くグループと大聖堂拝観前に時間の都合でシスティーナ礼拝堂へ行くグループとに別れて行動することにしました。私は後者組に入り、ミケランジェロの最後の審判の絵で有名なシスティーナ礼拝堂の高い天井を真上に眺めすぎて首筋が痛くなりました。そして、私たちグループはサン・ピエトロ大聖堂内部を拝観後、この日の最後の見学地へタクシーで向かいました。それは、古代ローマ時代以来ほぼ無傷で残っている唯一の



建物であるパンテオンです。この建物は、法隆寺よりも何百年も前に建てられたことを思うと気が遠くなるような不思議な感情に襲われました。カメラ記録係の重政氏もご夫妻でこちらのグループに入られていたため、スペイン広場は行くことができず、記録アルバムにはこの広場の写真は載っていません。

帰りは、切符を買うにもまごまごしながらローマの地下鉄に乗り、ホテルに一番近い駅で降り、夜道を30分ほど歩いてホテルまで帰りました。ラッシュアワーの地下鉄内ではスリに遭うのではないかと異常に緊張し、開き締めの際に妙な大きな音を立てるドアに気を取られながら不安な一時を過ごしました。

先住民族エトルリア人の遺跡

第3日目(11月6日)

ローマで2泊した後、この日はチャーターバスでピサまで移動しました。途中でローマから北西に40～50kmのところにあるティレニア海岸近くのエトルリア人の遺跡タルクィニアに立ち寄り、古墳と国立タルクィニア博物館を見学しました。ここはメインの観光ルートから外れており、観光客は私たち以外には1団体を見かけたのみでした。女性のガイドさんは、ゆっくりと話す英語ならば我々の多くがある程度理解出来ていることが分かること、すごくゆっくりと喋ってくれたことが印象的でした。遺跡入り口の売店で購入した古墳壁画の絵はがきには、当時の人々の理想の生活ぶりが描かれており、おおらかな性描写もあり興味を引かれました。博物館近くの町の中で日本人の青年に出会いました。何でも、この近くでクロスカントリーの大会が開かれるということで、それに参加するためにここにやってきたとのことでした。どこにでも日本人はいます。尚、エトルリアについては、山川出版の世界史教科書「詳説世界史」には「ローマはイタリア人の一派のラテン人が、半島中部ティベル河畔に建設した王政の小都市国家からおこり、前6世紀末に先住民族の



エトルリアの古墳壁画

エトルリア人からでた王を追放して、共和制をつかった。」という1文の中に出てきます。

タルクィニア見学後は、イタリア半島西部の海岸線を走る道路を北上し、西海上のティレニア海に浮かぶ、一時あのナポレオンが流されたエルバ島を眺めピサに近づいて行きました。タルクィニアでは晴れていた天候もこの頃になると空模様が怪しくなり雨が落ちてきました。

ピサの宿泊先であるアイローネ・ピサ・パークホテルに到着する前に、スーパーマーケットのカルフルに立ち寄り、みなさんは食料やお土産を買い込みました。私は村木先生ご推薦のトルテリーニを10個ほど買い、帰国後お土産として何人かの人に配りました。この頃には周囲はすっかり暗くなり雨も降っていました。後になって思ったのですが、果物をここで買っておくべきだったと。イタリアのホテルの食事には、野菜や果物が殆ど出されません。

そして、田園地帯にあるホテルに到着し、夕食を取って各自各部屋に分かれて明日のために早めに就寝しました。

フィレンチェの丘の上から

第4日目(11月7日)

今日は強行軍のためホテルで朝食を取っている時間がなく、AM6:00 起床 7:00 スタートで、朝食はバスの中で取り、サンドイッチ、ジュースにみかんが付きしました。目的地に到着するまでの間、

バス中で連日
のように行わ
れた村木先生
と小沢先生の
レクチャーは、
同行者の教養
を高め健康維
持に貢献した
と思われます。
この日の天候
は、ピサのホテ
ルを出発した
時には曇って
いましたがフ



ィレンツェに着く頃にはすっかり晴天となっていました。まずは、フィレンツェの市街を見渡せるミケランジェロ広場へ行き、サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会等が遠望できるフィレンツェの市街を背景に記念写真を撮りました。ここでは、埼玉県私立中学生が修学旅行に来てるのに出会い驚きました。市内では、ウフィツィ美術館、ガリレオが埋葬されているサンタクロチェ教会、橋の両サイドに土産物屋が立ち並んでいるベッキオ橋等を観光して回りました。この日の私の昼食は、セルフサービスのレストランで、3種類のマカロニとビールでした。

ピサのホテルに帰る途中でピサ市内に立ち寄り、有名な斜塔とドォーモを見学しました。私たち一行の多くは、斜塔のてっぺんまで息を切らして登りました。斜塔の階段を登るときは、平衡感覚を保てずバランスを崩すこともあり妙な気分を味わいました。

バスプールから斜塔まで歩いて行く途中の民家の庭先に、かなり大きなブーゲンビリアの木が地植えにされており、11月初旬に花が咲いていました。他の家の庭先ではハイビスカスが咲いているのも見かけました。ピサの緯度は北緯43度と北緯44度の中間にあり、この位置は日本列島では札幌のやや北に当たります。アルプス以南のイタリア半島、そのイタリア半島内のアペニン山脈

以南は、アルプス以北のヨーロッパ人から見れば、柑橘類が実り熱帯性の花が咲くまさに温暖の地だったのだと思います。

ピサの町からホテルまでは、夕暮れの町を散策する組とホテルに直行するグループとに分かれました。私は後者に入り、前者の人たちの中にはうわさに聞くジプシーの子供たちに囲まれ、怖い目にあった人がいたそうである。

大学の発祥地ボローニャ

第5日目(11月8日)

この日は昨日と異なり出発まで多少の時間があつたため、ピサ郊外の田園地帯にあるアイローネホテルの周囲を散策し、ホテルの前で記念撮影もしました。ホテルの周囲には多数のネコが徘徊しており、これらのネコが決して人家の敷居を越えて入らないようにしつけられていることが印象的でした。

ピサのホテルを9時30分に出発する頃の空は曇っていましたが、アペニン山脈を横切りボローニャの町に着く頃にはすっかり晴天となっていました。11月初旬のイタリアではアペニン山脈中の木々の緑はかなり残っており、高度を上げた辺りで美しい紅葉が見られました。

バスはボローニャの町に入り、しばらく市中を走った後駐車場に着きました。落ち着いたある古都という

印象ではあつたものの至る所に落書きがあり、観光の町の雰囲気壊しているように思いました。



ここでは昔からのボローニャ大学の校舎を見学しましたが、しかし、現在は講義は行われていなくて、大学は別の場所に移っているとのことでした。他にはサンペトロニオ聖堂やマジョーレ広場を見学しました。私たち数人は、この町でもっとも高いというアジネッリの塔に登りボローニャの市街全景を眺めることが出来ました。

私たちは再びバスに乗り、平坦な農地が広がっているロンバルディア平原の一部を横切り午後7時頃ヴェネチアのホテル、ホリデイインヴェネチアマルゲーラに到着しました。

ヴェネチアングラスに映る歴史

第6日目(11月9日)

8時に朝食を取りました。メニューはパン、チーズ、ハム、エッグという内容で、相変わらずイタリアのホテルでは野菜サラダ類、果物類が出ません。9時30分にチャーターバスで港まで行き水上バス・ヴァポレットでムラーノ島に渡りヴェネチアングラスの博物館を見学しました。ホテルを出発する頃は霧が立ちこめていましたがムラーノ島にいる間に霧は晴れてきました。同じ島内のガラス工芸で著名な店に行きその製作工程を見学した後、皆、ヴェネチアングラスのお土産を購入しました。私は、数万円ほどする気に入ったガラスセットがあり、購入するか否か迷いましたが手持ちの現金が残り少ないこともありやめました。しかし、日本に帰った後買ってくれば良かったと後悔しました。旅先で購入するか否か迷った場合には必ず購入すべきだと後で思いました。

水上バスでサンマルコ広場まで行き、有名なゴンドラに乗りヴェネチア市内観光をしました。船頭さんはどうも一杯引っかけているらしくかなり饒舌になっており、イタリア民謡を高らかに歌ってくれました。昼食はガイドさんおすすめの店に行きスパゲッティとビールでした。その後サンマルコ寺院や歴代のヴェネチア総督の官邸であった



サンマルコ広場

ドゥカーレ宮殿を見学しました。自由行動時間には96メートルもある鐘楼に登った人もおり、お土産を買い歩く人もいました。

私たちが行った時には水位も低く水没するなど予想もできないほどのサンマルコ広場でしたが、しかし、私たちの帰国後、水位が上がり水浸しになっているというニュースに接し驚きました。

第7日目(11月10日)

7時に朝食を取り、8時15分に霧の立ちこめるホテルを出発し、10時15分にはヴェネチアの空港を飛び立ち、ドイツのフランクフルトで乗り換え一路成田へ向かいました。行きも帰りも隣がドイツ人で、行きは中年のご婦人、帰りは青年であったが、私の英語が十分ではなく10時間ほど一緒でしたが、交わした言葉は2～3語のみで、またまたこの時も、もっと英会話の練習をしておけば良かったと思った次第でした。フランクフルトでは、イギリスへ足を延ばすグループとドイツに滞在する人と別れました。また、この乗り継ぎの時にも、日本の高校生の修学旅行集団に出会いました。黒づくめの制服の集団に会うと、異様な感じを受けました。

第8日目(11月11日)

成田空港には、午前8時40分頃に到着しました。かなりの高齢者集団であったにもかかわらず、皆病気にもならず無事に帰って来ました。グッドな旅でした。

村木先生、小沢先生、皆様お世話になりました。

Arrivederci

「世田谷線沿線の史跡を歩く」

に参加して

加藤直道

由木郷を指すだろうか。」

3月15日、下高井戸駅に約40名が集会した。前日の風雨とは打って変わり好天に恵まれた。講師は世田谷区立郷土資料館の解説員・木下はるか氏で、良質な資料により分かり易い説明をして頂いた。当日の友の会参加者は約10名。下町に比べて見学地間の距離は長かったが、多くの寺社を参拝した。世田谷区は近世農村地帯だったが、今や山陰の2県を凌ぐ人口で、区立文学館まで持つ文化発信都市として成長しつつある。

世田谷線

私が学生時代の昭和 30 年代半ばには、渋谷から片道 10 円・往復 15 円だったと思う。

当初は「玉川砂利電気鉄道」として計画されたので、長く玉川電車と呼ばれていた。

明治 40 年道玄坂上～三軒茶屋間、三軒茶屋～玉川間が開通、大正 14 年高井戸線（現世田谷線）三軒茶屋～世田谷間、世田谷～下高井戸間も開通した。昭和 13 年には東京横浜電鉄（現東京急行電鉄）に合併され、同 44 年には渋谷～二子玉川間、砧線二子玉川～下高井戸間の営業を廃止、三軒茶屋～下高井戸間の現世田谷線と改称した。都内では、都電荒川線とこの世田谷線のみが路面電車の面影を残す貴重な存在となっている。

西福寺

同名の寺が北区や豊島区にもあるが、いずれも真言宗である。当寺の正式名称は、光林山持明院といい、薬師如来立像が本尊（非公開）で、鎌

倉時代の作と見られ世田谷最古の木造仏という。
他に阿弥陀一尊像板碑があり区指定有形文化財と

なっている。

成勝寺

浄土真宗本願寺派。平安時代，京都岡崎に建立されてより，伏見，浅草横山町，築地本願寺地中寺院，世田谷宮坂と数度移転する数奇な運命に遇った。杉山杉風の墓あり。

世田谷八幡宮

源義家が後三年の役（1083～7）の戦勝を記念して建立説。1546年吉良頼康の再建以来吉良氏の氏神。徳川家康関東入部以来朱印地11石安堵。世田谷村の鎮守。神主大場氏。

豪德寺

1480 年世田谷城主吉良政忠が伯母弘徳院の
為に創建した「弘徳院」が始まり。臨濟宗より曹
洞宗に改宗。寛永頃彦根藩主井伊直孝がこの地で
鷹狩りをしていると、夕立が降ってきたのでこの
寺の門に雨宿りした。そこに現れた猫が手招きす
るので、庫裏について行った途端先程の門に落雷
して全焼。その後商家の神棚に顧客財宝を招く縁
起物として招き猫が飾られるようになった。1633
年直孝(法名久昌院殿豪徳天英居士)が葬られて、
井伊家菩提寺豪徳寺が誕生。直弼墓の3月28日は
逝去公式発表日。

世田谷城址公園

世田谷吉良氏8代二百数十年の館跡。南北と

西方に空堀を巡らし、烏山用水・北沢用水に囲まれた平山城である。15～16世紀の陶磁器や明銭・北宋銭が出土した。

勝光院

1335年世田谷城主吉良治家の開基と伝え、1546年吉良頼康（法名勝光院）が中興開基。

吉良家のみならず吉良家有力家臣の菩提寺。寺領30石。都内有数の曹洞宗古刹である。

世田谷(大場) 代官屋敷

1633年彦根藩主井伊直孝は関東に5万石加増されたが、世田谷領15（後20）か村の代官に任ぜられたのが大場氏であった（世田谷八幡宮神主大場氏同族）。代官屋敷の表門は国の重要文化財。区立資料館に大場家文書。屋敷前通りで例年ボロ市開催。

松陰神社

1859年松陰が獄死、1863年当地毛利家抱え屋敷移葬。1882年その隣に松陰神社を建立。境内に松下村塾が復元され、神道碑が立ち、頼三樹三郎・広沢真臣・桂太郎の墓あり。

駒留八幡神社

神像背部に北条時頼本尊と刻んだ銅板が立ち、1308年北条左近太郎が勧請したと銘記した経塚も発見された。戦国時代、吉良頼康が子の追福の為に若宮八幡を寄進した。

三軒茶屋

大山道が二子道と分かれる三叉路に茶屋の信楽屋、田中屋、角屋があったため。

◎参考文献

東京都歴史教育研究会編「東京都の歴史散歩・中・山手」山川出版社刊 2005

松本清張・樋口清之共著「東京の旅—今日の風土記3—」光文社刊 1966

樋口清之著「東京の歴史」弥生書房刊 1961

東京都地理教育研究会等編著「地図で歩く東京」日地出版刊 1999

東京都高等学校国語教育研究会編「東京文学散歩」教育出版センター刊 1990



幻の真慈悲寺を追う ― 調査ボランティアの動き 2

増田 克彦

発掘調査と研究発表と

歴史愛好者による社寺等のガイドや特定の事項事象について博物館等が組織した調査研究に従事する集団の存在は良く聞くとところだが、真慈悲寺調査ボランティアのような、人的規模の質量共に大きい、また広範囲且つ多様な内容を扱う組織はそう多くはなかろう。地方公共団体がその施策として、少なくない数の市民を持続的継続的に文化行政に参画させて地域の歴史的環境の継承をはかり、また、新しい視野を供えた博物館活動の展開に寄与させることを考えた場合、この真慈悲寺調査ボランティアグループの存在とその活動は貴重なものと言えようか。

この調査ボランティアをいつまで存続させるかについては、市当局は長期スパンで考えているとのことだったが、とりあえず、2010年に予定していた市立歴史館における真慈悲寺にかかわる2回目の特別展示は、2010年が市制50年に当たるところからその関連展示を優先させ真慈悲寺関連は延期するとのことで、少なくとも2011年までは存続する見込みとなっている。

さて、真慈悲寺調査ボランティアグループは、ボランティア相互における若干の意思疎通不足、行政のありようや市の文化施策、市当局また郷土資料館のボランティアに対する対応への不満といった様々な問題を内包しながらも、そこは老人集団、まあまあなあなで事を進めているというのが実態である。

名目50名実質30名強のボランティアは、08年度もまた07年度同様幅広い活動が続けてきた。市当局の意向に基づく郷土資料館の指導助言の下、5月には旧東電学園の職員寮を借り受け、簡単な展示場所と調査活動の拠点とすべく「幻の

真慈悲寺調査センター」を開設した。毎年4月に行われる「資料館まつり」では活動紹介のパネル展示を行い、また、京王線百草園駅前にある市立百草図書館の一階廊下壁面の一部で調査事業紹介の展示も開始した。

6月には百草八幡宮裏の、10・11月には07年度に行った東電総合研修センター内の柱穴群、配石群の第2次発掘調査、翌09年3月には新堂橋近くの平場確認のための実地踏査を行った。

真慈悲寺の堂塔の一つだったのではないかと考えられる百草園駅前にある真照寺住職から寺や地域に関する話を伺ったのははじめ、聞き取り調査も前進した。「百草・倉沢散策マップ」も市役所の幾つかの部署や他の市民団体と共同して作成中である。9月第2日曜日の百草八幡の祭礼に併せてのガイド、たましん地域文化財団と多摩交流センター共催の歴史講座「中世多摩の信仰と寺社」参加者へのガイドなど、約一時間半のコースを案内させていただいた方々、東電総合研修センター内柱穴群の現地見学会で案内させていただいた方々など、我々の話を聞いて頂いた方々は延べ300名を越えた。

ボランティア自身による見学会や研究会・発表会は計15回を数える。特に野村武男氏の瓦の比重計算は考古学研究史上貴重な試みであり、前田元治氏のパソコンを駆使しての百草山を中心とした三次元地図は地域の形状理解を大いに助けるものと言えようし、また、金村忠氏の建築史からのアプローチも大いなる示唆を与えてくれている。

2008年12月以降、「吾妻鏡」「阿弥陀如来」「瓦」「経筒・経塚」「玉縁口縁壺（三筋壺）」といった大まかなテーマのもとにチームを組み、その調査・検証にも取り組んでいる。

太陽の沈む位置確認も行われ、とりあえず、1

000年間の地軸変化や地形の変化を考慮しても、冬至の日の太陽は武蔵国衙や武蔵国分寺から見た場合、一の宮小野神社や百草山には沈まないこと、小野神社や百草山麓の大集落である落川・一の宮遺跡から見た場合、百草山には沈まないことが確認された。後日、沈まなかったのは観測地点が良くなかったため、計算上は武蔵国衙から見た場合小野神社に沈むはずであるとした見解や、数日後観測したところ沈んだとの報告がなされている。

なお、小田原市をはじめ各地を訪れ資料を収集した野村武男氏の「慈岳山松連寺開基への道」と題する17世紀後半から19世紀初頭にわたる慈岳山松連寺周辺にかかわる3時間を越える発表は壮観ですらあった。

これまでの研究成果の公表と保存とを主たる目的とした、郷土資料館紀要とは別立ての機関紙発行の話も進んでいる。遊びとしての新田義貞鎌倉攻めの道を辿る鎌倉往還上ノ道を基本とする太田の生品神社から鎌倉の鶴岡八幡宮までの全行程を徒歩で行く旅も、干潮時の稲村ヶ崎を渡るなど着々と進んだ。当然の事ながら、大小の懇親会もほぼ月一回のペースで開かれた。

2009年度には、百草八幡宮裏、真堂カ谷戸の国有地、東電総合研修センター内等での2ないし3ヶ所の発掘、百草八幡宮所蔵の5体の木製神像の鑑定依頼、また、百草八幡宮所蔵の阿彌陀如来座像、吾妻鏡の真慈悲寺関連記述、京王百草園出土の瓦、東電総合研修センター内出土の経塚・経筒、同じく東電総合研修センター内出土の常滑玉縁口縁壺（三筋壺）についての調査研究を進めることなどが予定されている。

阿彌陀如来座像の背銘

さて、調査ボランティア本来の目的である中世寺院真慈悲寺についての追求、「幻の真慈悲寺」から「幻」の文字を取り払っても良いかについては、文字史料が極めて乏しい状況からして発掘に頼らざるを得ないのだが、そこからすると、残念ながら未だ道遠しというべき状況にある。

6月中旬から7月初旬にかけての百草八幡宮裏における発掘では、幾つかの石組みが、また、10月の初めから11月末までの約2ヶ月間に取り組んだ京王百草園から南東へ約260メートルの地点にある東電総合研修センター内平場の柱穴群、配石群の第二次発掘調査では、142基の柱穴等と12世紀後半から13世紀のものとみられる常滑焼の破片11点、北宋銭1点が見つかった。柱穴から判断して、少なくとも、3間×3間、3間×2間、2間×2間の計3棟の建造物の存在を想定している。しかし、これが真慈悲寺と結びつくものかどうかの確証はまだ無い。

従って、ここでは製作事情が明らかな、且つ、信仰のありようを現在に伝える鎌倉期の仏像として貴重な、1950（昭和25）年に国の重要文化財に指定された銅造阿彌陀如来座像の背銘の内容について、現在何処まで解明されているかを少しくご紹介したい。

背銘全文を改めてご紹介すれば次のようである。

敬白治磨金銅影像法鉢陀座光三尺六寸
奉為皇帝 日本君主 当国府君 地頭名主
御願円満 安穩泰平 信心法王
子孫平安 悉地成就 師長父母 二親亡魂
助成合力 同共往生 乃至法界
平等利益 建長二年 大歳庚戌 孟夏之
天 七日壬刀 南閻浮提 日本武洲
多西吉富 真慈悲寺 施主源氏 願主仏子
慶祐敬白

1250（建長2）年のこととあるところから、「皇帝」は後深草天皇、「日本君主」は將軍藤原頼嗣、「当国府君」が北条時頼であることは明らかである。「願主仏子慶祐」は真慈悲寺の住職であろうこともまた明らかである。しかし、「地頭名主」は誰か、「父母」そして「二親」とは誰のことか、「施主」である「源氏」は誰かといったことについては長いこと論議の対象であった。

拙速かつ飛躍しすぎではないかとの批判が調査ボランティアの中に少なくないが、以下、07年度における今野慶信氏や上野さだ子氏の研究成果

の上に立ち、08年9月に峰岸純夫氏が立てた仮説の概要を紹介する。峰岸氏ご自身、いつ小説家になったのかとの批判を受けかねないとおっしゃるものではある。

銘文から読み解く仮説

「鎌倉幕府の重鎮であった安達義景の子に頼景がいるが、この頼景は関戸次郎を名乗っている。関戸（現在の多摩市関戸）は吉富郷の一角にあり、安達氏の拠点である上野国と鎌倉とを結ぶ上では軍事上極めて重要な地点にあたる。このことから「地頭名主」は安達頼景であるとはいえないだろうか。「施主源氏」は、単に「源氏」とあるところから、源姓の女性と想定され、当時の百草（旧名榎井・増井）の地と縁があり、阿弥陀如来座像を造立できるような女性は誰かということになり、「地頭名主」が頼景であるとすれば、「施主源氏」は、信濃の豪族であった小笠原時長の、その娘ではないかということになる。なんとすれば、小笠原時長の娘は安達義景に嫁ぎ、泰盛を生んでいる。頼景は泰盛の兄弟である。百草の地は吉富郷内にあり、その地に建つ真慈悲寺は、浅草寺、慈光寺と並ぶ当時の武蔵国に於ける大寺院である。阿弥陀如来座像造立の時点が義景の父景盛また時長の没後と考えれば、阿弥陀如来座像はその供養の為だったのではないか。従って、「父母」とは安達景盛夫妻、「二親」とは小笠原時長夫妻ではなかっただろうか。

安達泰盛は1285（弘安8）年、執権北条貞時の内管領平頼綱と戦い、その子盛宗、宗景、また兄弟の重景、長景とともに滅ぼされる。このいわゆる霜月の乱では、小笠原一族は縁者として安達氏に味方し、時長の娘の甥にあたる長泰、泰直、長泰の子盛時、長直が討死にして滅び去った。が、生き残った長泰の子の一人、泰行の系統は京都に赴き、後に室町幕府の奉公衆として『御的之記』に登場する。

時代は下って、真慈悲寺の跡地に建立されたと考えられる松連寺についての、『新編武蔵風土記

稿』所収になる1660（慶長15）年に書かれた『松連寺由来記』には、「天正年中賢恵上人松連寺住持義範依為俗縁、小笠原并小田野氏等大檀那共、當寺鎮守八幡宮修造畢、今年又兩村菩提檀那寺以十七ヵ村助成、建方丈者也」とある。賢恵は鶴岡八幡宮二十五坊筆頭の香蔵院主であり、天文（1532～1555年）末から天正（1573～1592年）期にかけて活躍した人物である。

1383（永徳3）年、吉富郷は鶴岡八幡宮の社領となり、以降香蔵院が管轄している。大檀那とある小笠原氏は時北条早雲に従って関東に下ってきた京都小笠原氏である。政清は將軍義澄に仕えたが早雲に従って関東に下り武者奉行となった。

1559（永禄2）年の小田原衆所領役帳によれば、政清の曾孫小笠原六郎康広が西郡飯泉郷に、小笠原弥六が同じく大沢郷に所領を得ている。小笠原氏は先祖である時長の娘の縁で檀那になったのではなからうか。つまりは霜月の乱での族滅の悲劇が、安達、小笠原両家に深く刻み込まれて伝承され、両家の連携は義景と時長娘の結婚にあり、時長娘が造立した阿弥陀如来が百草の地にあることは、小笠原氏にとって、悲劇の記憶とともに忘れがたいものになっていたのではなからうか。

あわせて、百草八幡宮の再建は、天文初年における戦国北条氏の鶴岡八幡宮再建の動きが地方に波及したという『快元僧都記』の記述を考えれば領けることであり、とすれば、百草八幡宮境内を中心とした、日野市指定天然記念物の樹齢4・500年といわれるスダジイの群生は、この時鎌倉から移植されたと考えることもできる。

なお、小笠原康広は北条氏滅亡の際には北条氏直とともに高野山に隠遁している。また、『松連寺由来記』に小笠原氏とともに大檀那とある小田野氏は元大石氏、拠点は現在の八王子市西寺方の小田野城のある小田野地区と大栗川流域の由木郷、北条氏照が大石定久の養子となったため定久の嫡子綱周が小田野を名乗った一族、下由木にその菩提寺永林寺がある。従って「兩村」とは吉富郷と由木郷を指すだろうか。」

第3回総会報告

友の会から都歴研へ◆今年も援助金贈呈



会費納入をお願いします

今年度の総会は6月13日(土)午後2時から都立戸山高校にて開催されました。

増田世話人代表の挨拶に続き鍵山世話人が議長に選ばれ議事に入りました。1号議案(2008年度事業報告)では本会員の各種行事参加が次のように報告されました。

講演会への参加	2回	延べ12名
史跡見学会参加	2回	延べ22名
全国歴史研究大会参加	9名	
海外研修旅行参加	台湾 1名	イタリア 7名

これらの活動の準備等に世話人会5回、発送作業5回で対応。

第2号議案の「会計報告」では、繰越金の内訳について、小澤会計から「本会は前納される会員が多くそれを含んでいる」旨の説明がありました。会計報告の形が読み取りづらい面もあり、次年度からの標記に工夫が必要との意見もありました。入会して会費納入のない会員もあり、3年目になりどのような対応をすべきかということも話題になりました。

第3号議案では、世話人のメンバー異動が代表より提案されました。飯田國雄、樋口秀司のお二人が退任され、木村清治、矢島恒之のお二人が新たに世話人に推薦され選出されました。飯田氏、樋口氏にはこれからも会の活動に協力してもらいますが、取りあえず今期でご退任です。ご苦労さ

までした。世話人は今年度も10人体制です。

今年度自主企画は-----

「白石・米沢の旅」

第4号議案の今年度の活動としては、年2回の講演会、年3回の史跡見学会など例年と同様の活動内容が提案されました。自主事業としての研修旅行は今年度は日本国内で実施することとし、大河ドラマ登場の直江兼続と上杉家を訪ねて「白石・米沢の旅」となりました。(10月18・19日実施)黒田比佐雄世話人が企画し、世話人会での決定を経てこの「会報」と共に会員の皆さんにお知らせし、参加を募ることになりました。時宜にかなった研修旅行であり国宝の「洛中洛外図屏風」が特別展示中とのことです。宿泊先も白布温泉の由緒ある旅館です。

5号議案(2009年度予算案)が承認された後、増田世話人代表から会員の拡大要請、全歴研の第50回記念大会が東京で実施されること、関歴研大会は11月13日、群馬県にある「富岡製糸場」であることなどのお知らせがあり、総会は終了しました。

都歴研講演会

「世界史のなかの日本の森」

一橋大学名誉教授 斎藤 修 氏

その後、都歴研総会の会場に移動し講演「世界史のなかの日本の森」(一橋大学名誉教授、斎藤修氏)を聴きました。経済学の視点から、ヨーロッパ、中国、日本の森林被覆率を比較し、日本の森林被覆率は先進国の中ではずば抜けて高く、これは徳川幕藩体制下で各藩が競って「育成林業」に取り組んだ結果であること、また明治になってからは政府が「ドイツ林学」を取り入れ森林を保護

育成してきたことなど数字を示されての考察でした。日本史にも世界史にも関わる内容で、講演の題名が事前に知らされていればより多くの参加者があったと思われました。

その後、会場にて増田代表より友の会からの援助金を都歴研の勝部純明会長に手渡し、感謝の言葉をいただきました。土曜日とはいえ授業日にあたり、各種会合や中学生の訪問などがありお忙しいなかで色々にご配慮くださった内田校長に深く御礼申し上げます。（村木 逸子 記）



都歴研等の09年度行事予定

全歴研50回大会

7/29 (水) ~ 31 (金)

会場 慶応大学三田キャンパス

シンポジウム「新学習指導要領」

分科会 日本史、世界史

特別分科会「日中戦争とイスラーム」

講演 福井憲彦「グローバル時代の歴史教育」
史跡見学会

A 《東京の近代建築—コンドルと弟子たち》

B 《常総の史跡見学》 鹿島〜佐原〜佐倉〜香取

C 《世界の紙と印刷の歴史を訪ねて》

全歴研都歴研共催海外研修旅行

8/18 (火) ~ 22 (土)

サハリン 費用 228,000円

関歴研群馬大会

11/13 (金)

会場 群馬県・富岡製糸場

本の紹介

奥 保善 著 (友の会会員)

『冷戦時代世界史』

内容は1945年第二次世界大戦の終了から1991年ソ連の崩壊まで。冷戦時代は、アメリカとソ連の対立イデオロギーの対立の時代。日本の政治も歴史教育もそのイデオロギーの影響を受けた時代。

そして私たちの青春の時代。あの時代は何だったのか、あの時真実だと思ったこと、正義だと思ったことは本当にそうだったのか。このような疑問に答えるには徹底した客観的な事実を追うことしかない。著者の熱意の結果630頁という膨大な分量の本になった。現役の先生が「冷戦時代のま

まった本がない。網羅してあるので役にたつ」と言っていた。つまり辞典のような本である。——ということで、価格は4200円+税お求めは、著者に直接ご連絡くださっても結構です。
つげ書房新社 03-3818-9274 (村木)

募集

友の会自主企画

白石・米沢の旅

片倉小十郎と直江兼統

期 日 10/18 (日) ~ 19 (月)

集 合 東北新幹線「白石蔵王」10:30

コース 白石城址、上杉家廟所、成島八幡、成島焼《白布高湯温泉「西屋旅館」泊》直江石提、巴堀、林泉寺、旧米沢高専、米沢城址、上杉神社(愛の甲冑)、上杉博物館(洛中洛外図)

費 用 23,000円程度

申 込 〆切 8/9 (金) 黒田まで

FAX 047-399-3669